本講と次講で、形容節の本質を解き明かし、「関係代名詞・関係副詞」とやらの虚構を暴きます

第２２講　『文。』の「形容詞化」から「名詞化」の作業のための手段「形容節詞」・・・「関係代名詞」なんて嘘こくな

文法用語は、一見してその役割がわかるものではなくてはならないはずです
「～文型」「完全自動詞」「不完全自動詞」「前置詞」「従属接続詞」「現在分詞」「過去分詞」等々、その用語からはどう整理し何を説明しようとしているのでしょうか
また、「関係代名詞」「関係副詞」と呼称して、何をしようとするものなのかわかるのでしょうか
本書では、旧来の空疎不明な「文法用語」に抗い、一見してその役割がわかる「文法用語」の確立に努め、新しい実体的な「文法用語」の流布浸透を図っていきます
本講と次講で問題とするのは、旧来「関係代名詞」「関係副詞」といわれているもので、「形容節」をつくりその目印となるものです
本書では、その役割に応じた命名から、**「形容節詞」**とします（略して「**形節詞**」）

以下２ページ少々、★印の本論に入るまでは１回目は読み流してください

まずは、『文。』で「単語」を修飾することを考察する本講の視点からはじめます
話題にしたい「名語句」を形容語１単語ではなく、**複雑高度に説明したい場合**は、**「句」や『文。』を使ってその「名語句」を修飾**することになります（第07講「同格」参照）
例えば、『「私が長年会いたいと思っていた」「尊敬するその人物」』のようにです（日本語では修飾語句は全て前に置きます）（ちなみに、「私は長年その尊敬する人物に会いたいと思っていた」が元の『文。』です）（「その尊敬する人物」は「目的名句」ですね）
ここで重要なのが、まずは**『文。』を使って「名語句」を修飾することの再認識**です
次に、**修飾される「名語句」はどこから来たのかという視点**です
すなわち、**基本となる元の『文。』**というものがあって、その**元『文。』の一部の「名語句」を抜き出して「中心名語句」として据え、残りの部分でその「名語句」を修飾していることを認識**し、その**元の『文。』を想定できるか**ということです
例文では、「私は尊敬するその人物に長年会いたいと思っていた」のような元の『文。』があり、修飾される「名語句」の「その人物」は、元の『文。』では「会う」の「目的役の名語句」であると遡れるかということです（実態は、ある『文。』中の「名語句」に注目し、それを「中心名語句」に据えて説明して、『文。』を「名詞化」することなのです）
その本質的重点は、
①**残った元『文。』が「形容詞」として働いているのだから、「形容節」**だということであり、**「形容節詞**（「*関係代名詞*」・「*関係副詞*」）**」は「形容節」を従えている目印**である
②**元の『文。』が想定でき、修飾されている「名語句」は還元されて、元の『文。』の「構成要素」や「役外族」として帰っていける**ところがある（「同格」との相違点）
③さらなる留意点は、**修飾している「形容節」には、欠落部分があり不完全な『節』である場合と欠落のない完全な『節』の場合の二種がある**ということです（詳細後述）

（旧来の２つの『文。』を結ぶという説明（結果現象の提示に過ぎない）は不合理だと思いませんか）

本講では、ある「名語句」を『文。』で修飾したい場合をみていきます
『文。』で「名語句」を修飾するのですから、**「形容節」の学習**ということを認識してください
そして、これは、従来、①「*関係代名詞*」②「*関係副詞*」といわれていたものの学習です
しかし、本書では、①「*関係代名詞*」②「*関係副詞*」という名称では何をしたいのかがわからないので、**「名語句」を『文。』で修飾するというその実体**に着目し、**「形容節詞」という上位概念のもと**、それぞれ、①**「構成要素名語句」を「先行詞」にして修飾するという観点**からと、②**「副句」や「形容句」の「後属役名語句」を「先行詞」にして修飾するという観点**から分類し、①を**「構成（来）形容節詞」**、②を**「役外（来）形容節詞」**と命名してみていきます

Ⅰ　「形容節詞」の存在意義・存在価値

「形容節詞」の理解にあたっては、**ある『文。』の中から「話題の中心に据えたい名語句（説明したい名語句）（中心名詞）」を引っ張り出してきて、その『文。』の残りの単語で「話題の名語句」を説明**しようとしているという視点が重要です

①英語の場合、**「説明したい名語句」を『文。』中から、「先」頭に「行」かせる**ということで、**「先行詞」**といいますが、とても「論理的で簡明な」命名ですね

②そして、**「形節詞」**を置いて、③**『文。』の残りの全ての単語で、「先行詞」を説明**するわけですから、**その残りの部分は、「意味のあるまとまり」として、大きな「形容詞」（「形容節」）となる**わけです（そして、「形容節」は「中心名詞」に吸収され、全体としては「名句化」されてしまうことに注意！・・・「大きな大きな名句」です）
ただ、**先行していった「名句」の部分が「欠落」して「穴」になっている「不完全な『節』」**ではありますが、一応「節」ということで、「形容節」とよびます

≪**「先行詞」＋「形容節詞」＋「不完全な『節』」**≫という原則を理解してください
≪「形容節詞」＋「不完全な『節』」≫の部分が、「形容節」です

「形容節詞」のほとんどが１語なので「形容節語」というべきでしょうね

④「形容節」ということで、「先行詞」の「名語（中心名詞）」を修飾しています
「名詞修飾」の「形容詞」は「中心名詞（ここでは「先行詞」）」に「吸収され消滅する運命」（「役外修飾族」）ですから、全体としては、「名句」となります

⑤**「名句」となれば、新たにつくられる『文。』の「主目補」として、組み込まれていく**ことが可能になります（**新たな大きな『文。』の「主目補」**となります）

『文。』であったものが、①「先行詞名語句」を出し、②「形容節詞」を置き、③「形容節」をつくり「先行詞」を修飾し、④その結果、吸収され・消滅し、「名句」となり、⑤次の大きな『文。』の中に組み込まれていく過程が理解できたでしょうか

ここまでは、論証的前置きですので、１回目は流し読みで、本講を読了したあと何度か読み直していただくと理解や認識が深まると思います

★ここから本論とさせていただきます

実質的に、「形容節詞」は何のためにあるのかというと、まずは、**「形容節」をつくり「形容節」の形式的な「目印」となり、説明したい「名語句」（「先行詞」）と「形容節」をつなぐ役割をする**ことですが、「形容節詞」は省略されうるものなので、必須的存在ともいえません（日本語には、「形容節詞」のようなものはありませんが、これは、日本語の「形容節」が「前置」されることにも起因すると考えられます）

では、例文で、元の『文。』からの「成立過程」をみてみましょう
まずは、日本語の例文ですが、日本語の場合、「説明したい名語句（「先行詞」）」は後ろに置いて、「形容節」は前に置きます
すなわち、**元の『文。』から、①「先行詞」を出し、③残りの『文。』である「欠落」のある「形容節」を前置し、④「形容節」が「先行詞」に「吸収・消滅」されることにより全体として「名句化」し、⑤次の新たなる『文。』の「主目補」になっていく**過程を理解してください（日本語には、②の「形容節詞」はありません）

きのう、私は、そのおもしろい本を読んだ。　（元の『文。』）
①「説明したい名句」

きのう、私が　欠落　読んだ、そのおもしろい本
③「形容節」（吸収消滅化）　①英語でいう「先行詞」

④　全体で「名句」

きのう私が（欠落）読んだそのおもしろい本は、とても役に立つ。
⑤「名主句」　（次の新たな『文。』への「実用転用化」）

次は、英文で見てみましょう（「目的役」を「先行詞」にしています）

I read the intesting book yesterday.
①「説明したい名句」

the intesting book which I read 欠落 yesterday
①「先行詞」　②「形容節詞」　③「形容節」（吸収消滅化）

---

④　全体で「名句」

The interesting book which I read 欠落 yesterday is useful.
⑤「中心主語」　「形容節」

ちなみに、次の『文。』を見てください
The interesting book which I read 欠落 is useful.

このように、「ｙｅｓｔｅｒｄａｙ」が元の『文。』に無かったら、「動詞」の「ｒｅａｄ」と「動詞」の「ｉｓ」が連続するという、一過的な現象が起きますが、「目的役」が「先行詞」になり、「欠落」が生じている「形容節」をもった「名句」が「主役」になると生じる現象なのです（「動詞」の連続現象で思考停止にならないでください）
このように、**論理的分析的**に考えれば、意外と楽なものなのです
原因がわかると納得できるのです

以上、『文。』の「目的役」を「先行詞」にしている場合をみながら、「形容節」の本質の理解を深め、「形容節詞」の存在意義を具体的に見てきました

これからは、「先行詞」として、元『文。』の「文役」や「役外族」のうちの、どんな「名語・名句」が引っ張り出されてくるのかの検証をしなければならないのです
頑張るべし

Ⅱ　「先行詞」になる「名語・名句」の検証

『文。』の中で、「先行詞」になりうる「名語句」にはどんなものがあるのでしょうか

１「主役」、２「目的役」、３「補役」、６「副句」の「後属名語句」、７「形容句」の「後属名語句」、８「所有格形容詞」のついた「名語句」、９「群成句詞（*群前置詞*）」の「後属名語句」などがあげられます

本講では、「構成要素」を「先行詞」とする「主流」「本流」「本家」ともいうべき「形容節」「形容節詞」に関する１・２・３と、４「形容節詞」の省略、５「同格」との違いを、順次みていきます

次講で、「傍流」「分家」「外様」ともいうべき「形容節」「形容節詞」に関する、６・７・８・９についてみていきます

１・２・３のように、元の『文。』の「構成要素」を「先行詞」にすると、「形容節」に「欠落」が生じ、「節」が「不完全な『文。』」になるのです

以下のふたつの表は、次講終了後に見直してください（はじめは見流してください）

	「先行詞」にする「名語・名句」	「形容節詞」に関する「注意事項」
1	「主　　役」	「主格の形容節語」＋「不完全な『節』」
2	「目的役」	「目的格の形容節語」＋「不完全な『節』」
3	「補　　役」	「主格」の「形容節語」の一種
4	（「形容節詞」の省略）	
5	（「同格」との違い）	
6	「副句」の「後属名語句」	「成句詞」＋「目的格の形容節語」＋「完全な『節』」 「役外（来）形容節語」への置き換え
7	「形容句」の「後属名語句」	「名詞」＋「成句詞」＋「目的格の形容節語」
8	→　「所有格」への書き換え	「所有格」の「形容節語」
9	「群成句詞」の「後属名語句」	「群成句詞」＋「目的格の形容節語」＋「完全な『節』」

成節詞	名節詞	名節語		
		名節句（群名節詞）はない		
	副節詞	副節語		
		副節句　（群副節詞）		
	形容節詞	構成来形容節詞	構成来形容節語（関係代名詞）	1・2・3
		役外来形容節詞	役外来形容節語（関係副詞・所有格の関係代名詞）	6・8
			役外来形容節句（成句詞＋構成来形容節語）	6・7
			役外来形容節句（群成句詞＋構成来形容節語）	9

まずは、「構成要素名語句」由来の「形容節本流」です

1、　「主役」を「先行詞」にする場合　　→「主格の形容節詞」

The man wrote the books .
①「説明したい名句」

the man who 欠落 wrote the books
①「先行詞」　②「形容節詞」　③「形容節」（吸収・消滅）
④全体で「名句」

I know the man who 欠落 wrote the books .
他　⑤「中心目的語」　③「形容節」（吸収・消滅）
⑤全体で「名目的句」

2、　「目的役」を「先行詞」にする場合　　→「目的格の形容節詞」

通常の「目的役」を「先行詞」にする場合は先述しましたので、ここでは、特殊な場合を見てみましょう

「授与動詞」の『文。』の「目的役」を「先行詞」にする場合です（「第１８講」参照）

「授与動詞」は「人に（人目的）」「物を（物目的）」と２つの「目的役」があります

The man gave the girl the flowers .
i　人目的　　ii　物目的

i　「人目的」を「先行詞」にする場合

the girl whom the man gave 欠落 the flowers
①「先行詞」　②「形容節詞」　③「形容節」（吸収・消滅）
④全体で「名句」

That is the girl whom the man gave 欠落 the flowers .
主　自　⑤「中心補語」　⑤全体で「名補句」

ii 「物目的」を「先行詞」にする場合

the flowers which the man gave the girl 欠落

①「先行詞」　②「形容節詞」　③「形容節」（吸収・消滅）

④全体で「名句」

The flowers which the man gave the girl 欠落 were roses .

⑤「中心主語」　⑤全体で「名主句」　自　名補

第１８講で学習しましたが、「他動詞」の一種に「授与動詞」というものがありまして、「人に物を与える」と、「人に（人目的）」「物を（物目的）」と２つの「目的役」を従えるという構造をとります
「形容節」に「授与動詞」がある場合、「目的役」が１つ残っているので、はじめは、なかなか「欠落」に気が付きません
　この点は、「５、名節同格」との違いのところで詳しくみてみましょう

「感」と「知っている単語」をたよりに読んでいると、
　最後の例文では、「ｇｉｒｌ　ｗｅｒｅ　ｒｏｓｅｓ」なんて読み方になってしまいますよ（「薔薇のような女の子」とでも読み込んぢゃうのでしょうか）
　「英語の苦手な人」は、とにかく「構造把握」と「論理」で読んでいくしかないのです

3、　「補役」を「先行詞」にする場合　→「主格の形容節詞」の一種

He was the brave man ten years ago .

①「説明したい名句」

the brave man (that) he was 欠落 ten years ago

①「先行詞」　②「形容節詞」　③「形容節」（吸収・消滅）

④全体で「名句」　②「形容節詞」は省略可能です（後述）

「彼が１０年前そうであったような勇敢な男子」

He is not the brave man (that) he was 欠落 ten years ago .

自　⑤「中心補語」　「形容節」（吸収・消滅）

⑤全体で「名補句」

（ここで、もし文末に「now」があったら、「ago　now」で「今昔」とでも訳して「バグり」ますか）

4、　「形容節詞」の「省略」とは

「形容節詞」が「省略」されるのは、どういう場合でしょうか

①「目的役を先行詞にした場合」
②「補役（特殊な主格）を先行詞にした場合」
③「ｔｈｅｒｅ　ｉｓ　構文の場合」
等があげられます

ここで、重要なのは、ただの丸暗記を迫られるのではなく、「なぜ、上記のような『形容節詞』が省略されうるのか」「普通の主格、所有格はなぜ省略されないのか」「**省略される場合の共通点や基本原理は何か**」という**原因追究の論理思考**です

重要な観点として、日本語には「形容節詞」はありません（常に「完全省略」です）
なぜでしょうか（まずは、必要性が無かったからだと考えられます）
「形容節詞」が無くても、前置された『文。』のようなものが常に「形容節」だと自然とわかるのです（「その本を読んだ人」「逃げた男」「父が芸能人である女の子」のように「形容節」が前置されると「主格や所有格の形容節詞の省略」も可能なのです）
「名語句」の前に「形容節」がある日本語の場合は、英語の「形容節詞」の省略と同じ現象が、「目的格」だけではなく「主格」「所有格」でも常に起きるのです
すなわち、『文。』ではなくて、**≪「文らしきもの（節）」＋「名語句」≫という「構造」で、「文らしきもの」が「名語句」を修飾している「形容節」だとわかる**のです

では、英語の『「形容節詞」の省略』とは何なんでしょうか
英語の「形容節詞」の省略の原因は、日本語の場合と同じです
≪「先行詞」＋「（主語にあたる）名語句」＋「動詞」≫という「構造」に由来するのです（**≪「先行詞」＋「文らしきもの」≫の「構造」**が重要なのです）（ここで、「目的役」だけでなく「補役」の「先行詞」の場合も省略が可能なことを察知できますね）

そして、**「形容節」が「名語句」の後ろにある英語の場合、「主格の形容節詞」のときは、「主格の形容節詞」がないと、元の『文。』と同じ形になってしまい、判別がつかなくなるので、「形容節詞」の省略は不可能**なのです
すなわち、「先行詞」＋「動詞」では、間に「形容節詞」がないと、元の『文。』そのものに戻ってしまうのです
従いまして、「主役」を「先行詞」とする場合は、「形容節詞」の省略は構造的論理的にあり得ないのです

それでは、「主格」の「形容節詞」を省略したらどうなるかを「ｋｎｏｗ」の「目的役」となっている場合を題材に具体的にみてみましょう

Ｉ know the girl who saw the accident ysesterday.
中心名主句　　「形容節」
私は、「きのう、事故を見た女の子（「名句」）」を知っている。

「主格」の「形容節詞」を省略すると、「ｔｈａｔ」が省略された「名節」の「目的節」になってしまいます

Ｉ know the girl（もしも省略）saw the accident ysesterday.

Ｉ know (that) the girl saw the accident ysesterday.
「名目的節」
「名節詞（成節詞）」の「ｔｈａｔ」の省略と同じとなり、≪私は、「その女の子がきのう事故を見たということ（「名節」）」を知っている。≫となってしまいます

≪「名語句（先行詞）」＋（関係代名詞の省略）＋「（主語にあたる）名語句」＋「動詞」＋（欠落）≫という「関係詞の省略可能な構造」を認識・理解してください
「主＋動詞」が残存する「『文。』らしきもの」の認識可能性の有無が重要なのです

そうすると、「ｔｈｅｒｅ　ｉｓ構文の場合」は、「ｔｈｅｒｅ」が「主語」の代用となって（「形式主語」ともいわれる）、「目的役先行詞」「補役先行詞」と同様の「構造」になっているので、「形容節詞」が省略されても、「形容節」であることがわかります（「名語句」＋「『文。』らしきもの」という構造があるのですね）

There was a wonderful park in this country.

a wonderful park (that) there was 欠落 in this country

≪補足ですが、「所有格の形容節詞」場合、「所有格」は「形容語」の性質を帯びているので、「文らしきもの」を伴いながらも省略が困難なのだと考えられます≫

5、　「名節同格（完全な『文。』）」との違い

「先行名語句」が後続の「形容節」内に帰っていける「欠落」の有無が重要視点です

「目的役」がひとつの「関渉文型」の場合は、「欠落」を見抜きやすいのですが、「２、」で見たように、「目的役」がふたつの「授与文型」の場合は、「目的役」がひとつ残っているので、「欠落」に気付きにくいので注意が必要です（「第１８講」参照）

「名詞」＋「形容節詞」＋「不完全な『文。』」　（＝「形容節」による「名句」）

He showed his fridend the news .
人目的　物目的

the news that he showed his friend 欠落
「形容節」「不完全な『文。』」

「彼が友人に（欠落）示した知らせ」

「名詞」＋「名節詞」＋「完全な『文。』」　（＝「名節同格」）

He showed his fridend the news .

the fact that he showed his friend the news
「名節同格」「完全な『文。』」　「欠落」はありません

「彼が友人にその知らせを示したという事実」

『文。』の「形容詞化」そして「名句化」という点や、「関係代名詞」というよりは「名句」化のための「形容節詞」と呼ぶべきことに共感していただけましたでしょうか

「形容節詞」は『文。』を「形容節化」しつつ「名句化」している「手段詞」という実体がつかめましたか（「形容節詞」の存在意義・存在価値が見えてきましたか）

次講では、「主流」から外れた「傍流的」な「形容節」についてみていきます

第２３講　「傍流的形容節」は「役外族」の「名語句」由来

「形容節詞」というものは、≪①『文。』中の「(「形容語句」同伴の）名詞句」を「先行詞」として出し、②次に「形容節詞」を置き、③『文。』の残りの部分を後ろにそのままつなげて「形容節」とし、「先行詞」を修飾し、④「形容節」は「吸収・消滅」の運命であるから、全体として「名句」になり、⑤次の新たなる『文。』の「主目補」「成句詞の後属役」となっていくという過程で、「形容節」の目印として活躍しているものである≫ということが理解できたでしょうか

前講では、「先行詞」となる「名詞」を「構成要素」すなわち「主目補」から選定してきました（ある意味、「主流」といえるでしょう）

本講では、**6、「副句」の「後属名語句」**や、**7、「形容句」の「後属名語句」**や、**8、「所有格」がついた「名語句」**や、**9、「群成句詞」の「後属名語句」**が、「先行詞」となっていく場合を見ていきます

『文。』の主流本流ともいうべき「構成要素」からの「先行詞」に対して、**『文。』の傍流である「役外族」からの「先行詞」**ですから、**「傍流的形容節」**と呼称・分類しているのです（「**外様形容節**」といってもいいでしょう）

では、順次、見ていきましょう

6、　「副句の後属役の名語句」を「先行詞」にする場合

He bought the books at the shop .

①「説明したい名句」

「at the shop」は「副句」ですね

「成句詞at」の「後属役」の「名語句」を「先行詞」にしてみましょう

the shop　which he bought the book at 欠落

①「先行詞」　②「形容節詞」　③「形容節」（吸収・消滅）

④全体で「名句」

この段階では、「構成来形容節語」と同様に「欠落」があります

しかし、もともと「副句」は「成句詞」＋「後属役名語句」であり、「at the shop」という元の「かたち」のように、「which」の前に「at」を移動することができるのです（まさに、「**形容節句**」ですね）

ｔｈｅ　ｓｈｏｐ　ａｔ　ｗｈｉｃｈ　ｈｅ　ｂｏｕｇｈｔ　ｔｈｅ　ｂｏｏｋ　無欠

　すると、「ａｔ　ｗｈｉｃｈ」という、≪**「成句詞」＋「構成来形容節語」**≫という**特別な「副句」的な「形容節句（群形容節詞）」**ができます
この段階で、「形容節」には「欠落」がなくなり『完全無欠な「節」』になりました
ここで、この「ｗｈｉｃｈ」は「成句詞の後属役」であることになり、「代名詞」的な性質をもちます（旧来の「*関係代名詞*」の命名由来のひとつですね）

ｔｈｅ　ｓｈｏｐ　ａｔ　ｗｈｉｃｈ　ｈｅ　ｂｏｕｇｈｔ　ｔｈｅ　ｂｏｏｋ

　さらには、「ａｔ　ｔｈｅ　ｐｌａｃｅ」という「副句」が「ｔｈｅｒｅ」という「副語」に置き換えられるように、**「ａｔ　ｗｈｉｃｈ」という「特別な副句」が「ｗｈｅｒｅ」という「（副詞的な）形容節語」に置き換えられる**のです
　そして、**「副句」の「後属役名語句」に着目し「先行詞」としたということで、「役外来形容節詞（語）」と命名**したのです（別称**「副詞的形容節詞（語）」**）

ｔｈｅ　ｓｈｏｐ　ｗｈｅｒｅ　ｈｅ　ｂｏｕｇｈｔ　ｔｈｅ　ｂｏｏｋ
「役外来形容節詞（語）」に導かれた「形容節」

「成句詞＋構成来形容節語」をおきかえた**「役外来形容節語」**は、**「完全な『文。』」を持った「形容節」を従え、「形容節」の標識**となるものです

　このような「理屈」はともかく、注目していただきたいのは、
「構成来形容節語」＋「不完全な『節』」
「成句詞」＋「構成来形容節語」＋「完全な『節』」
「役外来形容節語」＋「完全な『節』」
　ということです

「役外来形容節語」が使われている場合、その元の『文。』では「副句」の「名語句」であったものを「先行詞」にしているのであって、「構成要素」の「名語句」はそのままなので、「役外来形容節語」に導かれる「形容節」には「欠落」は生ぜず、「完全な『文。』」となるのです（「構成要素」を「先行詞」にすると、「形容節」に「欠落」生じるのはいいですね）

以上のように、**「時・場所」等の副句中の名語句に注目して「先行詞」にすると、「役外来形容節詞（語）」に導かれた「形容節」が生じる**ことを認識してください

以上は、「副句」から「先行詞」を出す場合について、「場所」の「副句」を例にして「役外来形容節語」をみてきましたが、**「役外来形容節語」には、「時」「場所」「理由」「手段」の４種**あります

これから、残りの「時」「理由」「手段」について、「場所」と同様、以下の手順でみていきます

「構成来形容節」から「役外来形容節」への「手順」
① の『文。』の「副句」の「後属名語句」から「先行詞」を出す
②「構成来形容節詞」を置き、残りをそのままに「形容節」をつくる
③「成句詞」を「構成来形容節語」の前に移動する
④「成句詞」＋「構成来形容節語」を「役外来形容節語」に置き換える

「時」をあらわす「役外来形容節語」の「ｗｈｅｎ」

① Ｈｅ ｓａｗ ｔｈｅ ｒａｉｎｂｏｗ ａｔ ｔｈａｔ ｔｉｍｅ ．

② ｔｈａｔ ｔｉｍｅ ｗｈｉｃｈ ｈｅ ｓａｗ ｔｈｅ ｒａｉｎｂｏｗ ａｔ 欠落

③ ｔｈａｔ ｔｉｍｅ ａｔ ｗｈｉｃｈ ｈｅ ｓａｗ ｔｈｅ ｒａｉｎｂｏｗ

④ ｔｈａｔ ｔｉｍｅ ｗｈｅｎ ｈｅ ｓａｗ ｔｈｅ ｒａｉｎｂｏｗ

「理由」をあらわす「役外来形容節語」の「ｗｈｙ」

① Ｈｅ ｂｅａｃｍｅ ａ ｄｏｃｔｏｒ ｆｏｒ ａ ｒｅａｓｏｎ ．

② ａ ｒｅａｓｏｎ ｗｈｉｃｈ ｈｅ ｂｅｃａｍｅ ａ ｄｏｃｔｏｒ ｆｏｒ 欠落

③ ａ ｒｅａｓｏｎ ｆｏｒ ｗｈｉｃｈ ｈｅ ｂｅｃａｍｅ ａ ｄｏｃｔｏｒ

④ ａ ｒｅａｓｏｎ ｗｈｙ ｈｅ ｂｅｃａｍｅ ａ ｄｏｃｔｏｒ （通例使わない）

⑤ ａ ｒｅａｓｏｎ （省略） ｈｅ ｂｅｃａｍｅ ａ ｄｏｃｔｏｒ

⑥ （先行詞省略可） ｗｈｙ ｈｅ ｂｅｃａｍｅ ａ ｄｏｃｔｏｒ （単なる「疑問名節」）

「役外来形容節語」の「ｗｈｙ」の場合、「役外来形容節語（⑤）」か「先行詞（⑥）」のいづれかを省略することが通例になっています

「先行詞」を省略した⑥は、**「疑問副詞兼名節詞」に導かれた「名節」**となります

「手段」をあらわす「役外来形容節語」の「ｈｏｗ」

① Ｈｅ　ｓｏｌｖｅｄ　ｔｈｅ　ｐｒｏｂｌｅｍ　ｉｎ　ａ　ｗａｙ ．

② ａ　ｗａｙ　ｗｈｉｃｈ　ｈｅ　ｓｏｌｖｅｄ　ｔｈｅ　ｐｒｏｂｌｅｍ　ｉｎ　欠落

③ ａ　ｗａｙ　ｉｎ　ｗｈｉｃｈ　ｈｅ　ｓｏｌｖｅｄ　ｔｈｅ　ｐｒｏｂｌｅｍ

④ ａ　ｗａｙ　ｈｏｗ　ｈｅ　ｓｏｌｖｅｄ　ｔｈｅ　ｐｒｏｂｌｅｍ　（使わない）

⑤ ａ　ｗａｙ（必ず省略）ｈｅ　ｓｏｌｖｅｄ　ｔｈｅ　ｐｒｏｂｌｅｍ

⑥ （必ず先行詞省略）　ｈｏｗ　ｈｅ　ｓｏｌｖｅｄ　ｔｈｅ　ｐｒｏｂｌｅｍ　（単なる「疑問名節」）

「役外来形容節語」の「ｈｏｗ」の場合、「役外来形容節語」か「先行詞」のどちらかを必ず省略することになっています

「先行詞」を省略した⑥は、**「疑問副詞兼名節詞」に導かれた「名節」**となります

「役外来形容節語」のまとめ　→　**「形容節」を導く**のが仕事

①「時・ｗｈｅｎ」「場所・ｗｈｅｒｅ」「理由・ｗｈｙ」「方法・ｈｏｗ」がある

②「ｗｈｅｎ」「ｗｈｅｒｅ」「ｗｈｙ」のかわりに「ｔｈａｔ」がつかえる

③「ｔｈｅ　ｔｉｍｅ」「ｔｈｅ　ｐｌａｃｅ」「ｔｈｅ　ｒｅａｓｏｎ」等の典型的な「先行詞」は省略されやすい　→　「疑問副詞兼成節詞」の導く「名節」になる

④典型的な「先行詞」のあとの「役外来形容節語」は省略されやすい

⑤「ｔｈｅ　ｒｅａｓｏｎ」「ｗｈｙ」の場合、どちらかが省略されるのが通例

⑥「ｔｈｅ　ｗａｙ」「ｈｏｗ」は必ずどちらかかが省略される

蛇補足ですが、

⑦「ｗｈｅｎ」「ｗｈｅｒｅ」には、「構成来形容節語」同様、「継続的用法（カンマ用）がある（「継続的用法→副詞的用法」は別巻で学習する予定です）

7、　「形容句の後属役の名語句」を「先行詞」にする場合

「形容句」が「主語」についている場合の「形容句」の「名語句」を「先行詞」にしてみましょう

Ｔｈｅ　ｔｒｅｅ　ｉｎ　ｔｈｅ　ｐａｒｋ　ｉｓ　ｆａｍｏｕｓ．
「説明したい名句」

「ｉｎ　ｔｈｅ　ｐａｒｋ」は「形容句」ですね
「成節詞ｉｎ」の「後属役名語句」を「先行詞」にしてみましょう

まずは、「先行詞」を出し、直後に「構成来形容節語」を置いてみましょう

ｔｈｅ　ｐａｒｋ　ｗｈｉｃｈ　ｔｈｅ　ｔｒｅｅ　ｉｎ　欠落　ｉｓ　ｆａｍｏｕｓ
「先行詞」　「形容節」（吸収・消滅）
全体で「名句」

論理的ではありますが、このような段階のままでは、「ネイディブでは」使用されませんので、（致し方ありません、）「ｉｎ」を「構成来形容節語」の前に出します

ｔｈｅ　ｐａｒｋ　ｉｎ　ｗｈｉｃｈ　ｔｈｅ　ｔｒｅｅ　ｉｓ　ｆａｍｏｕｓ
「先行詞」　「形容節」（吸収・消滅）
全体で「名句」

これは、「構成来形容節語」＋「ｔｈｅ　ｔｒｅｅ　ｉｓ　ｆａｍｏｕｓ」で、日本人にとってはわかりやすいのですが、次のように、**元の『文。』の語順を尊重して単純に「先行詞」を出したあとの「欠落」部分に「構成来形容節語」を埋め込むのがネイディブ仕様**なのです

ｔｈｅ　ｐａｒｋ　ｔｈｅ　ｔｒｅｅ　ｉｎ　ｗｈｉｃｈ　ｉｓ　ｆａｍｏｕｓ
「先行詞」　「形容節」（吸収・消滅）
全体で「名句」

一見変に見えるかもしれませんが、元の語順に忠実な「形容節」で論理的なので、これが標準的に使用されるようです
このように、「成句詞＋形容節語」が「形容節」の文頭ではなく、「形容節」の中にまぎれている場合があるのです

では、「形容句」が「目的語」についている場合をみてみましょう

I forgot the name of the actor .

「説明したい名句」

全体で「名目的句」

① the actor whom I forgot the neme of 欠落

② the actor of whom I forgot the neme

③ the actor the neme of whom I forgot 欠落

元の「名目的句」の語順のまま

（私がその名前を忘れてしまったその俳優）

どれも可能ですが、①が一般常用的で、③が論文で多用されるようです

（参考：the actor whose neme I forgot 欠落 ）

8、 「所有格形容詞のついた名詞」を「先行詞」にする場合

The name of the dog is funny.

「成節詞ｏｆ」の「後属役名詞」を「先行詞」にすると、

the dog the name of which is funny

となるのは、もう大丈夫ですね

では、元の『文。』の「ｏｆ the dog」は「形容句」ですが、「所有格」（＝「形容詞」）で元の『文』を書き換えると、

The dog’s name is funny.

となりますが、「The dog」を「先行詞」とすると、「’ｓ」が「所有格の形容節詞」（「形容語」の性質をもっていますし、「ｈｉｓ」と同じです）としてあらわれてきます

ｔｈｅ　ｄｏｇ　ｗｈｏｓｅ　ｎａｍｅ　ｉｓ　ｆｕｎｎｙ
（その名前がおもしろい犬）

「形容句」と「所有格」との深い関わりが見てとれたでしょうか
「形容句」と「所有格」から派生する「形容節詞」は意外と難しいものですかね
従来は、「所有格」の「*関係代名詞*」といわれてはいますが、「形容句」からくるものであり、しかも、「所有格の代名詞（ｍｙ・ｏｕｒ・ｙｏｕｒ・ｈｉｓ・ｈｅｒ・ｔｈｅｉｒ）」の本質がそもそも「形容詞」なのですから、「所有格の*関係代名詞*」ではなく、「*関係形容詞*」と呼ばれるにふさわしいものなのですが、旧来的命名は無視して、「形容節詞」のひとつに過ぎないものと位置づけて理解してください

「ｗｈｏｓｅ　ｎｅｍｅ」の「ｗｈｏｓｅ」は、「ｎａｍｅ」という「名語」を修飾しつつ、「形容節」をつくっていて、まさに**「形容詞的形容節詞（語）」**と呼ぶに値するものですね

９、　「群成句詞の後属役の名語句」を「先行詞」にする場合

「群成句詞」

「群成句詞」とは、**≪複数の単語の集合体で「成句詞（語）」の役割を果たしているもの≫**で、「ｉｎ　ｆｒｏｎｔ　ｏｆ」「ｂｅｃａｕｓｅ　ｏｆ」「ｂｙ　ｍｅａｎｓ　ｏｆ」「ｉｎ　ｓｐｉｔｅ　ｏｆ」「ｔｈａｎｋｓ　ｔｏ」「ｏｕｔ　ｏｆ」等です

これらは、複雑な状態・状況を表したい場合で、たまたま一語であらわす適切な「成句詞」がなかった等の理由で、合成して「成句詞」がつくられているのです

ですから、「Ｉ　ｌｉｖｅ　ｉｎ　ｆｒｏｎｔ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｓｔａｔｉｏｎ.」を「ｉｎ　ｆｒｏｎｔ」を「副句」で「ｏｆ　ｔｈｅ　ｓｔａｔｉｏｎ」が「ｆｒｏｎｔ」を修飾する「形容句」と完全に分解しても有用ではないのです

「ｉｎ　ｆｒｏｎｔ　ｏｆ」で「～の前に」という意味の「一語の成句詞」と理解した方が合理的なのです（「ｂｅｆｏｒｅ」より「前」の意味を強調できるのでしょう）

このように、**≪複数の単語で１語の「成句語」と同様の働きをして、「品詞分解」をする合理性がなく、１単語として扱うべきもの≫**を**「群成句詞」**といいます

では、「群成句詞」の含まれた『文。』の、「群成句詞」の「後属目的名語句」を「先行詞」にしてみましょう

He lives in front of the station.

「群成句詞」　「先行詞にする名句」

全体で「副句」

the station in front of which he lives

日本語になりにくいのですが、「彼が住んでいるところの前にある駅」とでも訳すしかないですね

「成句詞」＋「構成来形容節語」ということで、「役外来形容節語（「where」）」に置き換えると、「彼が住んでいる駅」となり、「彼は駅そのものに住んでいる」ことになってしまい、置き換えることはできません

１０、　「意味の強い成句詞の後属役の名語句」を「先行詞」にする場合

「前置詞」の個性が強い場合、むやみに「役外来形容節語」におきかえると、「言いたい内容」が損なわれます

また、その意味の強さゆえに、必ず「構成来形容節語」の前に置きます

「duaring」「near」「since」「beyond」「besides」等があげられます

He studied English during the summer.

「先行詞」にする「名語句」

the summer **during which** he studied English

「彼が英語をずっと勉強した夏」

ここで「during which」を「役外来形容節語」の「when」に置き換えると、「ずっと」という細かい意味があらわせなくなりますから、置き換えることはできないのです

「傍流的形容節」という考え方は難しかったですかね
まずは、「構成来形容節語」「役外来形容節詞」の基本を確実におさえ、「傍流的形容節」の全体の理解を目指してください

次講と次々講で、本稿の仕上げに入りまして、文意を整える役割効果を有する「助動詞」と「助動詞」を使った「条件」の提示についてみていきます